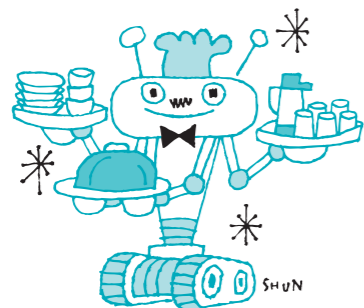


見守り機器

バイタルだって取得可能
モニタリングはセンサーにお任せ

施設での利用が中心だった見守り支援システムですが、在宅で活用しようという取り組みも出てきています。緊急対応的な使い方だけでなく、緩やかな見守りの中で、生活の様子が立体的に浮かび上がってくる効果もあります。モニタリングはセンサーにお任せなんていう時代も？ (編集部)

取材協力：やさしい手



国の助成を受けて開発されているロボットの中でも、見守り支援機器はもっとも熱い分野。過去にはテレビ電話やカメラを使ったものが多かったが、最近はセンサーを使った機器が全盛期。ICTの進化もあり、すでに実用化されている分野といっても過言ではない。

現在開発されているものの多くが介護施設をターゲットにしているのに対し、広く一般への普及を目指した製品も登場し始めた。「離れて暮らす親のために、子世代が導入する」といったケースも。インターネット回線を経由して検知したデータが送信され、見守る側はスマートフォンからいつでも状況を確認できる。使う側の世代がICTに抵抗がなくなっていることもあり、介護発よりも早く普及しそうな印象だ。

ケアマネジャーの木下育子さん(やさしい手・渋谷東支援事業所)が担当する加代さん(仮名、80代)も、見守り支援機器を導入している一人。認知症で一人暮らし、導入はキーマンである姪の不安軽減がきっかけだったが、実際に使ってみると意外な事実も見えてきたという。

センサーで生活リズムをチェック

加代さんは要介護2。都内のマンションで一人暮らしをしている。認知症で、歩行に不安があるが、ADLはほぼ自立。長年仕事に打ち込み、独身。デイには関心がなく、週7回の訪問介護で生活を支えている。隣市に住むキーパーソンの姪が月数回訪ねてくる以外は、1日を家で過ごす。

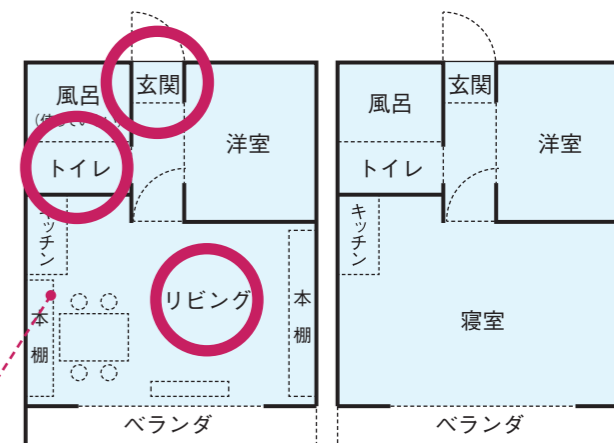
「本当ならデイサービスに通って、歩行面を中心に心身機能の維持向上が図れるといいのですが、何度提案しても難しく」と、ケアマネジャーの木下さんは話す。自分はまだ大丈夫という気持ちが強いのだという。

一方、一人で歩行器を使って外出し、家に戻れなくなることも。転倒の不安もあり、食事「ちゃんと食べている」とは言うもののどうもあやしい。「生活全体が心配」、そんな姪からの訴えもあり、自費で見守りセンサーを導入することになった。

図1 加代さん宅の間取り図とセンサーを設置した場所



センサーは2種類。左がドア用、右が室内用



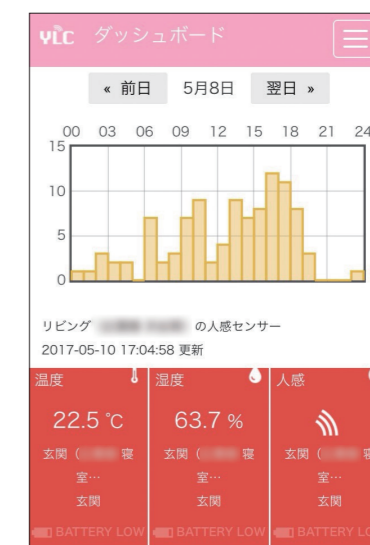
リビング



導入したのは、「やさしい手 Live Connect」。動きを検知するモーションセンサーの使用は一般的だが、そのほかに「温度」「湿度」「明るさ」を感知するセンサーと、ドアの開閉情報を取得するセンサーの2種類がある。そもそも見守り支援システムで悩ましいのが、見守られる側のプライバシーの問題だ。映像と違って、温度や明るさという生活に密着した要素であれば抵抗感も少ない。加代さんもすんなり納得してくれたという。

データ活用し、ケアプランを見直し

設置したのは今年2月。玄関とトイレにドア開閉センサーを、日中過ごすことが多いリビングにモーションセンサーを置



マンション2世帯分が生活スペース。ベランダを使って行き来している

生活の様子は、スマホから確認できる。遠くの家族が見守るのにも便利

いた。加代さんが動くとき活動量を検知する。ヘルパーが来ると活動量が2倍に。これはセンサーが二人分の行動量を感知するからだ。

ところで加代さんは、少し変わった家の使い方をしている。同一マンションに隣り合った2世帯を所有しており、ベランダを使って行き来しているのだ。日中はリビングで過ごし、夜になるとベランダを通って隣の寝室で就寝一と、ケアマネの木下さんも考えていた。

だが、このセンサーを導入したことで意外な事実が分かった。加代さんは日中だけでなく、ほぼ24時間リビングで過ごしていたのだ。寝室は使っていないこと、リビングでごろ寝していること、眠りが浅く質の高い睡眠がとれていないことなど